青き花あこがれゆけど思ひ寢の
夢だに許ちぬ筑紫路の三年の旅に
新しく戀ふ人も無き灯火の
影に痩せたる頬を母に見せにゆかばや。

故里の尾張は枯れし草の原
海見ぬ國の淋しさに我まつ人に。

（四十一年十二月二十四日）

短歌

泥　人の子

泥濘むこゝろの瓶の上澄みを人むごきかあませてまろこぶ。
愁傷よ喜悅の極と何わかつたゞ全身の脈亂しあり。
ゆへもなく去られにし女の胸に湧く想出のごと雲飛ぶゆふべ。
月の門君は皷くに我れ推すに慣れ來しかはす相並ぶ家。
をみなちの胸を彩る初色と血の氣にもゆる春のあかつき。
いくさある星の世界の野をすぎて木枯いまのわがむくろ吹く。
「陰謀せる衆の刃に強いて我れ色たゞしあり」この夢を見る。
秋の雲故郷山のたゝずまひつと暮れつゝと照りつほろびぬ。
秋の雨黑う朽ちぬる大木の檜原をうちぬこの期終るや。

愛と云ふ道草くうてたくれたる駒はそのまふたくれてぞ行く

屹、煙草すねてむづかる君が型まねびおどする春の日曜

虚心にもかふることばをのたまひて我が困んずるを笑み給ふかな。

大河流「時」の流れと相あうて極なき流れ流れゆく身や。

胸の瑟淨きに過ぎて白き手のふれず音もなく秋を朽ちゆく。

海

千條

杯のこまかき波をめでしれてうたげのにはの群集にゐぬ

御心をやうやうにしてよとかへしさてもつゝくる戀のつめたき

君見るにはた海見るに春見るに標準点のかろく動ける

君と云ふ重き荷物を失ひてかろらになりぬされどさびしき

わが轍いかれるときに君をゝく野の花をゝく足なへをゝく

衝動にくせづきし今ともすれば火にも入らむずあさましきかな

簿記の線、なめげの文字、するよどむ滴の運定にインキ壺見る

師と親と人ひとりとをほこらまく帽に三條の白き線まく

阿蘇の煙二條のぼるかたかたのにぶさに君を占ひ〻かな

ほたる草さては黄くち葉はゐのなきものを撰びてこのみ給へり
よその子と君と手とりて歩めどもねたまぬほとのたぞとなりぬる
「千鳥丸」「怒濤」「帆柱」「名をば海」戀のことのみたゐず思へる　（學兄平澤に）

露草

白狀す遇々君を思ふ日は酒沽ふ錢を持たぬ時あり。
其昔わすれし顏を見むためにふと思ひ出て四つ辻に立つ。
一片の麵麭をのこしぬ今日の日の明けたる故に明日うたがはず。
時ありて我死に君も亦死あむ其後の世はたもふすべあし。
反逆のともがら戴せし飛行器は稍君はあれ歡聲をあぐ。
君が辭書その一字無しあまたゝびくれども遂にたゝ一字なし。
我水に字を書くかなた小女等は糸あき機をはた々と織る。
くら々と眼くらみぬ黑髪のかげの外なる世界のぞみて。
われ寢ねて天をうかゝひ月と日と駢びてたゝぬ戀をあはれむ。
蒼穹にたゝ一點の輕氣球射むとひしめき人數多ゆく。
戀うらん價は知らすわれ見るとたあし夢見る小女にうらん。
もの足らぬ人にもあるかさびしげに薄荷煙管（パイプ）を吸ひて居給ふ。